

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

イタリア民話の世界⑨

民話を訪ねる旅 最終回

剣持 弘子

イタリア民話の旅の報告も今回が最終回となりました。この旅では思いがけずさまざまな出会いがあり、それらが帰国後の仕事にも少なからず影響を与えてくれました。最後にこの旅の成果の一部を報告したいと思います。

●小旅行とさらなる出会い

フィレンツェに一年間暮らしている間に、他の地方にも何度か小旅行を試みました。暮れにはヴァチカンのサン・ピエトロ広場でキリスト生誕の場面を再現した大きなプレゼピオに出会いました。箱庭のような小さなものは、ガルファニャーナの教会に飾ってあるのを見る機会がありましたし、フィレンツェでは店先でも見かけましたが、こんな大きいものは初めてでした。



【プレゼピオ】

また、旅先では本屋に入ってその土地の昔話集を探すようにしていました。あるとき、中部アブルツォ地方の小さな町の本屋で小型の昔話集をみつけました。これは、読みたいけれど読めなかった方言の資料集を標準語に直した上で、何冊かの小冊子に編集し直して売り出したもののようなでした。

この冊子については、帰国後、嬉しい出会いがありました。少しは進歩したイタリア語を忘れないうちにと、個人レッスンを求めて入校したベルリッツ町田校でのことです。

担当の男性教師とおしゃべりをするうち、彼がアブルツォ出身だということがわかり、そして、お母様が、例の昔話集の愛読者だということがわかったのです。信じられない思いで、その本を注文したいとお願いしました。先生は早速お母様に連絡してカタログを取り寄せてくださいました。そして、私の持っていない巻をチェックしてお母様に知らせてくださり、お母様からまもなく本が送られてきました。

●論文のヒントをもらう

ベルリッツではもう一つ出会いがありました。もう一人の女の先生に、「子どもの頃昔話を聞いたことがありますか？」と質問してみたのです。

すると彼女は思いがけないことを言い出しました。子どもの頃、「赤ずきんちゃん」の話聞いて

怖くて眠れなくなり、今でもトラウマになっているというのです。

一般によく知られたドイツの『グリム童話集』の「赤ずきん」では、狼に呑み込まれた赤ずきんは、猟師に助け出され、〈めでたし〉で終わっています。ところが、これに先立つフランスの『ペロー童話集』の「赤ずきんちゃん」では、狼に呑み込まれたまま助け出されずに終わっているのです。先生が聞いたのはペローの「赤ずきんちゃん」だったのでしよう。この「赤ずきんちゃん」については、その後、面白い経験をしました。

イタリアから帰ってきたあと、日本女子大で講座を持つことになり、授業でペローの「赤ずきんちゃん」のコピーを配ったときのことです。「途中までしかありません」と言う声が続いて上がりました。「いいえ、それで全部です」と答えたところ、「ひーっ！」という悲鳴があがったのです。こっちがびっくりしました。そして、ベルリッツの講師の「トラウマ」を思い出しました。

ところで、イタリアには「カテリネッタ」という話があります。前段の状況は違いますが、女の子が恐ろしい敵に徐々に脅かされながらついに食べられるという状況が一致するというので、「赤ずきん」に分類されています。そして、イタリアではこの手の話が、〈怖がることを楽しむ話〉として結構好まれているのです。

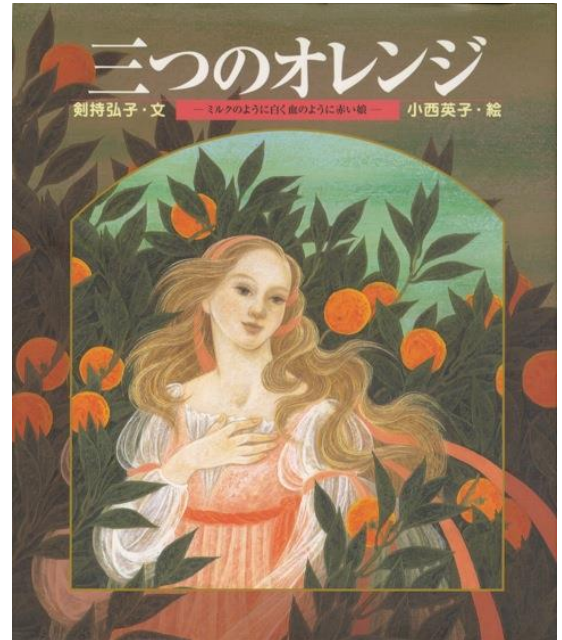
ところが、ペローが「赤ずきんちゃん」に、「優しい男には気をつけろ」などという、余計な教訓をつけたばかりに現実的な怖い話になってしまったのです。でも、これは一種のゲームなのです。「怖い話」というのは、状況によっては楽しめる話にもなるのです。このことをヒントに私は『イタリアから見た「赤ずきん」』という論文を書き、〈怖がることを楽しむ話〉があることを示しました。

●資料集の出版

帰国して真っ先にやりたかったのは、ヴェントウレツリ教授に頂いた資料集の翻訳・出版でした。先生に約束したことでしたから。

イタリアの魔法昔話は長い話が多いので、全部は収められません。中でも、もっともイタリアらしい話としてこだわりのある「三つのオレンジ」はぜひ選びたかったのですが、この資料集のなかの

「三つのオレンジ」はあまり豊かな語りではありませんでした。先生はすでに二千話以上も集めたと豪語されていたので、その中にないわけはないだろうと、「もっと豊かな語りの『三つのオレンジ』を」とお願いしてみました。あまり待たされることなく、タイプで打たれた、期待以上の「三つのオレンジ」が送られてきました。



【三つのオレンジ】

この「三つのオレンジ」を含めた『イタリアの昔話』(三弥井書店)ができあがり、早速先生にお送りしたのですが、ここでまたうれしい出会いがあったのです。

絵本画家の小西英子さんから突然お手紙がきて、この「三つのオレンジ」を絵本にしたいと言ってくださったのです。すでに活字になっていたいくつかの「三つのオレンジ」の中で、小西さんはこのトスカーナ地方の話を気に入ってくださったのです。そして、小西さんのお力で借成社から絵本『三つのオレンジ』が出版されました。

●ヴェントウレツリ教授のその後

でき上がった本をお届けしてまもなく、先生から新しい資料集が送られてきました。500頁を越す分厚いものでした。ガルファニャーナの素晴らしい語り手ジェンマから教授が聞き取った48話が収

められていました。方言と標準語の対訳です。ざっと目を通していると、なんと、ある話の解説の中に私の名前があったのです。先生のご存知なかったその話の分類番号のことで私が指摘したことがあったのですが、そのことを書いてくださっていたのです。そこには、私のことをちゃんと研究者として紹介してありました。たどたどしいイタリア語で、語りの現場までついてきた得体の知れない〈おばちゃん〉を、やっと研究者として認めてくれたようでした。

先生の訃報が入ったのはそれからまもなくのことでした。まだ50代だったはずです。フィレンツェ大学に問い合わせたところ、後任だという女の先生からお手紙が来て、テープは全部預かっているから、いつでも聞きに来るように、と書かれてありました。でも、その宝の山を活かす力は私にはありません。方言が聞き取れ、それを翻字できる若い人が出てこないものでしょうか。

【今月のお話コーナー：説明伝説】

「麦束の跡(月に染みがあるわけ)」

月が今よりも明るかったころ、つまり、月の顔を翳らす染みがまだなかったころ、一組の恋人がいた。二人は毎晩、娘の家の麦打ち場でひそかに愛を交わしていた。

ある晩、二人がいつものように麦打ち場にいると、月がいつになく明るく照らした。そのとき不意に足音がした。若者は恋人の父親がこっちにやってくるのに気がついた。見つかるにちがいない。若者ははっと思いつくと、近くに積んであった麦の束をつかんで、月に向かって投げつけた。月はほんのしばらく翳っていたので、そのあいだに若者は逃げることができた。父親がそこに来てみると、娘しかいなかった。

でも、あんまり強く麦束を投げたので、その夜からずっと、月にはその痕が残っている。

* 月の染みについては、日本では一般にウサギが餅を搗いていると言われていますが、世界各国にはさまざまな言い伝えがあります。イタリアにも他に、泥棒が自分の悪行を隠すために月に何かを投げつけるという話があります。

月の染みについての世界の言い伝えは下記の本に詳しく紹介されています。

日本民話の会・外国民話研究会編『新装改訂版 世界の太陽と月と星の民話』三弥井書店
2013年



(完)

(イタリア民話研究家)

～会館だより～

イタリア語 無料体験レッスン

7月より開講の夏期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。入門者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア会館

7/5(水) 11:00～12:30

7/8(土) 11:00～12:30

● 四条烏丸：ウイングス京都

7/6(木) 19:00～20:30

● 大阪梅田校：大阪駅前第4ビル

7/3(月) 11:00～12:30

7/5(水) 19:00～20:30

イタリア語 無料カウンセリング

学習経験者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア会館

7/8(土) 14:00～(各人 30分ほど)

スペイン語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア会館

7/8(土) 11:00～12:30

ローマで双子育児⑦

浅田 朋子

近頃、日本では育児に積極的な父親のことを「イクメン」とよぶらしいが、私はこの造語が苦手な好きになれない。「すごく良い父親、理想の旦那」と賞賛する言葉として、育児に積極的な父親を妙に持ち上げていることに違和感があるからだ。

褒めていることが気に食わないわけではなく、育児に積極的な父親がこんなに特別視され、注目されているのが不思議なのだ。必死で孫の面倒をみる祖父母は、まるで子育てに協力するのが当然かのように注目されないのに…。

私はイタリアでこのような父親を賞賛する言葉を周りから聞いた事がない。私の世代では、イタリアでも働く母親が増加したこともあり、育児や家事を夫婦で分担している家庭が多い。これは日本でもほぼ同じではないだろうか。しかし妻が働いていても夫より負担する部分は多い。特に育児に関して、日本では夫に何か頼むことを躊躇してしまふ人が多いのではないだろうか。

私は、夫に子供のおしめを変えてもらったり、お風呂に入れてもらったりしたら、「ごめんね、ありがとう」と言ってしまう。まるで自分が怠けているような、変な感情になってしまうのは「これは母親がやるべきこと」と自分で思い込んでいるからだろう。

夫に何か頼む時は「簡単にできること、もしくは楽しんでやれそうなこと」を無意識に選んでいる気がする。だから、妻の多くは夫がしたり顔で「やったよ」とかいうと「ありがとう」といいつつ、「それできるわな、できる事選んで頼んでるわけだし。楽なことだけやって、いいよね」と心の中で嫌みを言ってる自分がいるのではないだろうか。

育児や家事を積極的にやってくれているという

「イクメン」も、自分ができる簡単で楽なところだけをやっているのではないだろうか？これはきっと日本人の「言わなくても、育児の大変さを夫はわかってくれているはず」という、相手に期待しすぎるところからくる、すれ違いのような気がする。だから、夫が妻の子育ての責任の重さや孤独、苦勞を何もわかってくれていなかったと気付いた時、失望と怒りの感情が大爆発するのだ。



【大好物のジェラートを食べてご機嫌】

夫の友人でアート・ジャーナリストのマウリツィオ、48歳。妻のマリア40歳と1歳半、4歳の息子がいる。束縛される事が嫌いで、悠々自適に独身生活を送っていたマウリツィオがそれまで同棲していたマリアと正式に結婚すると聞いた時は、皆かなり驚いた。しかも子供もすぐできて「父親」という一番彼のイメージから遠かったものになったのである。いつもの気難しい顔はそのまま、育児に黙々と取り組んでいる姿はちょっと笑ってしまう。

ある日、マウリツィオ宅で夕食会があった。私と夫、写真家のマヌエラと彼女の婚約者が招かれた。

21時から夕食なので、子供たちはもう寝ているかと思ったら、家の中で暴れまわっていた。元

気いっぱいである。1歳半の息子もよちよちと家中を歩き回っている。子供たちは人懐っこいので来客に興奮しているのである。暴れる4歳の息子をマリアは叱りつつも「まあ、いいか～」というゆるい雰囲気ですわに腰掛け微笑んでいる。マウリツィオはというと台所で必死に夕食の準備をしていた。台所には朝から準備していたであろう、たくさんのお前菜や冷製パスタ、磨かれた食器、ソースやらパンやらが所狭しと並べられていた。「これ、全部マウリツィオが用意したの？」と聞くと「そうだよ」という。マリアが担当した部分はなさそうである。

「さあ、みんな席について、乾杯しよう」というとプロセッコ(発泡ワイン)を皆に振る舞い、アンティパスト(前菜)、夏野菜の冷製パスタと手際よく給仕していく。さらには「マヌエラは茄子が苦手だから茄子抜きでパスタを別に作っておいたよ」と気遣い抜群である。「へえ～」とマリアは感心している。この間、マリアはたまに子供の相手をすくくらいで、いっさい食事の手伝いはしない。しばらくすると「子供、寝かしつけてくるわね」と言って子供部屋へ行った。すでに22時半。さすがに子供たちも起きているのが限界のようで、すぐに寝付いた。15分もしないうちに席に戻ってきたマリアに「きみ、何も食べてないじゃないか。生ハムは？パスタは？」と気を使うマウリツィオ。「食欲ないのよ」とちびちびとワインを飲むマリア。

しばらくみなで談笑していると「うえ～～～ん」と1歳半の息子が泣き出した。「チツ」と舌打ちしてマウリツィオが子供部屋へ消えた。マリアは動じない。息子の泣き声はさらに激しくなり「マンマ～～～！！！！マンマああああ！！！！」と叫んでいる。マリア、沈黙。子供部屋での修羅場を想像した私たち。「ギャあああ————！！」と雄叫びが聞こえ、マウリツィオが息子を抱えて席に戻ってきた。「マンマがいいらしい」と皆が百も承知していることを無表情でいい、子供をマリアに渡す。マリアはまさしく聖母のような表情で「マンマがいいのね」と優しく抱きキスをしている。

マウリツィオはこの時点で疲労困憊である。4歳の息子が起きない事をみな願っていたのは言うまでもない。「日本の梨を使ったサラダにしてみたよ」とおしゃべりに盛りつけられたサラダを運んで

きたマウリツィオの手が震えていた。お疲れさん…、もういいから…、日本の梨とか茄子が食べられないとか、気を遣わなくていいよ、無理するな。

マウリツィオが汚れたお皿を下げて新しいサラダ用の皿を持ってこようとした時、マヌエラが「この皿のままでもいいわよ！汚れてないし。」とナイスな提案をした。「だめだよ。味が混ざるし。」細かいマウリツィオ。「じゃあ、紙皿もってきなさいよ、そうしましょうよ。」「気を遣うなよ、皿くらい…」「紙皿！！」「そうだ、紙皿でいいよ」「いいね、紙皿」と紙皿大合唱。マリアは知らんぷり。しぶしぶ紙皿をもってきたマウリツィオに「最初から全部紙皿でよかったんじゃない？」と身も蓋もないことをいうマリア。



【パパに叱られて、ふてくされポーズ】

食後酒をいただいている時に、朝からの作業で疲れた手がまた震え、マウリツィオはグラスを滑らし割ってしまった。ああ…みんなのため息。「子供が危ないから。」と夜中の1時に掃除機をかけ、グラスを丁寧に掃除するマウリツィオの後ろ姿を見て、私たちは心から「お疲れさん」といいたくなった。

さて、マリアはそんなマウリツィオに特別に感謝なんかしてないし気を使っている感じもない。だからといって威圧的指示しているわけでもない。ただ、普段から夫にやって欲しい育児や家事をどンドン言って、やってもらっているのである。でき

なければ、それはしかたがない。大切なのは、自分の今の状態や、何をしてくれると助かるかを話し合うことなのだ。

日本の夫婦と違うのは、「相手は分かってくれているであろう」とせず、お互いの気持ちや相手に望むことをきちんと伝えていることではないかと思う。当然口論になる場合が多いが、お互いを分かり合うために彼らにとって喧嘩はあたりまえのことなのだろう。

マウリツィオは「マリアの要求を全てこなすのは僕には難しい。でもどうにか子供と家庭内の事を協力してやってるよ。それに比べれば子育ての愚痴を聞く事なんか楽な事さ。」と私の夫に言っていたそうだ。

父親が子供のためにできることは、なにも直接子供に関わることだけではない。毎日の育児に疲れた母親は少しのことで子供にイライラしてしまったり、子供としゃべることさえ億劫に感じてしまう。そんな時、父親が皿を洗ったり洗濯物を干したり買い物をしたり、そういう家庭内のことを少しでもやってくれるだけで妻は余裕ができて、子供とゆっくり関わることができ、「明日もがんばろう」と思えるのだ。

そして育児の愚痴を夫が聞いてくれるだけで、妻のストレスがどれほど軽減されることか。子供を遊園地に連れて行ってくれたり、特別な事をしてくれるよりも、日々少しずつ子供に接してくれて、育児に関してちょっと話を聞いてくれるだけでいいのである。

「今日一日いっぱい遊んだから、いいだろう。パパはがんばったんだぞ。」ではなく、毎日の小さなふれあいの積み重ねが大切なのではないだろうか。子供は毎日少しの時間でも父親と一緒にいるだけで満足なのだ。日本のお父さんたちは日々の穴埋めのため、休日や時間のある時に家族に対して何か特別なことをしないといけないと気負いすぎて、反対に育児から遠のいてはいないだろうか。マウリツィオは何も特別な事はしていない。率先して旅行や遊びを計画することもないし、おしめだって替えられないし、子供をお風呂に入れることもできない。でも、マリアに寄り添いじっと話を聞き、自分ができる範囲のことを毎日子供のためにしているのである。

「完璧に育児や家事ができないことがあっても、まあいいじゃないか。家族がこうやって一緒にいれるんだから」。別の友人が言っていた。家族が毎日一緒にいることが一番大切な、イタリアの家庭のちょっと肩の力の抜けた子育てもなかなかいいのではないかと思う。



【デパートのゲームコーナーでカーレース！】

(元当館語学受講生)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>